

「春はあけぼの」

「春はあけぼの、やうやう白くなりゆく」有名な清少納言の「枕草子」の出だしです。

健康増進と気分転換のためにと昨年の秋から始めた私の早朝散歩の習慣も、どうにか一冬を越して、今日まで続いています。ほぼ毎朝6時前に起きて約40分間、歩数にして約5千歩、距離にして4キロ強を歩いています。

この冬は、地球温暖化も一休みとなったかと嬉しい錯覚に陥るような、寒さの厳しい冬でした。冷え込んだ朝は、布団から出るのが億劫になるし、散歩の間は、ずっと暗い中を歩いているせいか、気分もあまり浮き立たず、「夜明け前が一番暗い、我慢、我慢」と言い聞かせていることもありました。

それが、春が近づくにつれ、次第に周囲に明るさが増してきました。寒さも和らぎ、空気も緩んできて、そうすると、散歩をしているときの気分も明るく、思考も前向きになってくるから不思議です。そんな時、散歩コースの途中から屋島を眺めていると、自然と「やっぱり『春はあけぼの』だなあ」という気持ちが湧いてきて、枕草子の冒頭の句が頭に浮かんでくるのです。

日の出前、屋島の周りを取り囲む空がぼんやりと明るくなってくる様子は、まさに「山ぎは、少しあかりて」。さらに「紫だちたる雲の細くたなびきたる」様子が加わると、清少納言でなくとも思わず深呼吸をして、手を合わせたくくなるような厳かさおごそと美しさを感じます。早朝にカタルシスを得られるような感動があるから、早起きも苦にならなくなってきました。

今、その屋島では、約1340年前の「屋嶋城」やしまのきが長年の眠りから目を覚まそうとしています。この「屋嶋城」は、倭やまとの国が663年に白村江はくすきのえの戦いで唐・新羅の連合軍に敗れた後、唐・新羅軍が侵攻してくることを恐れて、天智天皇（中大兄皇子なかのおおえのおうじ）が各地の要所に築かせたと日本書紀に伝わる古代山城の一つです。

那須与一なすのよいちの扇の的をはじめとして、いくつもの伝説が残っている源平の古戦場跡というだけでも歴史のロマンにあふれ、史跡として大きな価値を持つ屋島で、更に約500年以上遡った古いにしえの時代の光がパールを脱いで漏れてこようとしています。屋島自身が一つの「あけぼの」を迎えていると言えるかも知れません。

そう思いをめぐらせていると、本当に朝の散歩は「いとをかし」ものなのです。